

2001年文科『栄花物語』現代語訳

かくて四条の大納言殿は、内の大殿の上の御事の後は、
このようにして藤原公任殿は、娘の死の後は、

よろづ倦じはて給ひて、つくづくと御おこなひにて過ぐさ
（日々を）過ぐし
全てのことをすっかり疎みなさつて、しみじみと御仏道修行にて

せ給ふ。法師と同じさまなる御有様なれど、「アこれ思へ
なざる。法師と同じ状態の御様子であるれども、」このことは、思うと

ばあいなきことなり。一日にても出家の功德、世に勝れ
つまらないことである。一日であったも 出家の功德は、世の中で優れて

イめでたかんなるものを、今しばしあらば、御匣殿の御事
めだたいものだというけれども、今からしばらく経てば、孫娘生子が東宮妃となる事

など出で来て、いとど見捨てがたく、わりなき御絆にこそ
などが出てきて、一層俗世を見捨てがたく、（孫娘生子は）どうしようもない出家の御障害でいらつ

おはせめ。さらば、このほどこそよきほどなれ」と思し
しやるだらう。そうであるならば、今の時期が（出家するには）良い時期だ」と決意しなさつて、

とりて、人知れずさるべき文ども見したため、御庄の司
人に知られないように（出家前に対応）すべき領地の地券などを見て処置をして、荘園の管理人

ども召して、あるべき事どものたまはせなどして、なほ
達を呼び寄せなさつて、（荘園の処置に関する）必要なことを仰るなどして、「やはり今年（中）に出家

今年と思すに、女御の、なほ人知れずあはれに心細く
しよう（）」とお思いになるけれども、女御のことが、やはり密かに しみじみと気の毒で心細いと

思されて、「人の心はいみじういふかひなきものにこそ
自然とお思いになって、「人の心というものはとても どうしようもないものである。」

あれ。などておぼゆべからむ」と、いと我ながらも
どうして女御のことを自然と思ひ出すのだろうか」と、自分（の心）ながらも とても

くちをしう思さるべし。何ごとかはあると思しまはし
残念にお思いになるにちがいない。「何事があるだらうか。いや、何も気にすることはないだらう」と思い巡らし

つつ、人知れず御心ひとつを思しまどはすも、いみじう
つつ、人知れず 御心を独りぞ 迷わせなさるのも、
とつても

あはれなり。この御本意ありといふことは、女御殿も知ら
気の毒である。
この(公任に)出家の御意志があるといふことは、
女御殿も(こ)存じて

せ給へれど、オいつといふことは知らせ給はず。
あるけれども、
「いつ出家するか」といふことは、(こ)存じてはない。

かかるほどに、椎を人の持てまゐりたれば、女御殿の
このようなときに、
シイの木の実を(ある)人が(公任の元に)持ってきて参上したので、(公任は)女御殿の

御方へ奉らせ給ひける。御箱の蓋を返し奉らせ給ふと
方へ献上なさった。
(シイの木の実が入っていた)御箱の蓋を返却し申し上げなさると

て、女御殿、
いって、女御殿(の歌)、

カ
ありながら 別れむよりは なかなか
(あなたが出家してしまつて)生きていながら別れるとしたら、それよりはかえつて、

なくなりにたる この身ともがな
亡くなつてしまつた「この身」であればなあ。「木の実」ではないが。

と聞こえ給ひければ、大納言殿の御返し、
と申し上げなさつたところ、
大納言の御返歌は、

奥山の 椎が本をし 尋ね来ば
奥山の椎のものを
訪ねてくるならば、(木に残る木の実のように、)

とまるこの身を 知らざらめやは
この世に留まるこの身を知らないだろうか、いや知るだろう(から、会えるよ)。

女御殿、いとあはれと思さる。
女御殿、「とてもしみじみと悲しいことだ」とお思ひになる。